

(IV-33) 蔵を活かした栃木市の街づくりについて

栃木県都市施設課 正会員 鈴木 昌司
栃木県都市施設課 大垣 清

1 栃木市の概要

栃木市は、栃木県の南部に位置する人口約8万6千人を擁する地方都市である。江戸時代に日光東照宮へ通じる例幣使街道の宿場町として、また、市街地中央を流れる巴波川の舟運により繁栄し、北関東有数の商都として発展してきた。

江戸時代末期に4度の大火に見舞われたことから、防火性に優れた蔵造りの家屋に建て替えられ、蔵の町並みが形成されていった。しかし、明治以降、輸送手段が舟運から鉄道や自動車に転換され、社会活動が衰退したことや商業の近代化に伴い、蔵の前面を改装し、蔵を隠した町並みに変わってしまった。

昭和53年の「やすらぎの栃木路」キャンペーンを契機に、地域住民からも街づくりに対する気運が高まってきたことから、町の特徴であった蔵を活かした街づくりに官民一体となって取り組むこととなった。

2 蔵の実態

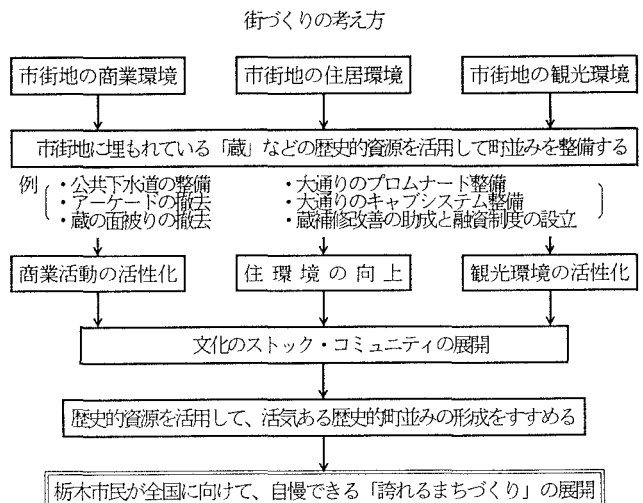
栃木市が「蔵の街」と呼ばれるようになったのは昭和50年代に入ってからである。それまでは2、3の旧家の蔵造りの建物が知られていただけで、その実態は明らかでなかった。

そこで、昭和61年度に栃木市制50周年を記念して、蔵造りの建物の本格的調査を実施した結果、市街地には450棟を越す蔵造りの建造物が残されており、その40%が栃木大通り（例幣使街道）沿い及び巴波川左岸沿いに集中していること、見世蔵（店蔵）、土蔵、石蔵と多種であること、そして、幕末期の古い形式をとどめたものも多いことなど極めて貴重な町並みであったことが判明した。しかし、ほとんどの蔵は改装され、前面から蔵と判別できる建物は少ない状況である。

3 蔵を活かしたまちづくり

栃木市の特徴である「蔵」を活かした街づくりを進めるためには、蔵を所有し商店を営む住民の理解と協力が必要不可欠なことから、昭和63年度に地元の商工会議所、自治会、文化協会、学識経験者及び関係行政機関の協力を得て「栃木市誇れるまちづくり委員会」を組織し、整備エリアの選定や蔵としてリニューアルするための計画や手法について検討を進め、官と民が一体となった街づくりがスタートした。

目抜き通りであり蔵が多く残る栃木大通りは、町並みと道路の一体的整備を図るため、平成元年度に官民学の代表者からなる「栃木市大通り周辺整備推進協議会」を設置し、町並み景観と道路の整備について検討を行い整備計画を策定した。



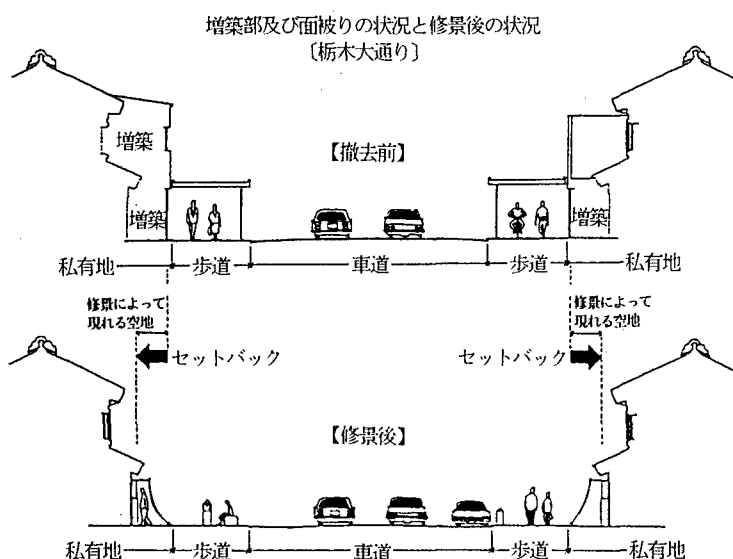
蔵の町並を復元するための道標として「栃木市町並み修景ガイドライン1990」を定め、色彩や看板等を統一することや、アーケードや面被りを撤去することとした。さらに、蔵の修景が促進されるよう「栃木市歴史的町並み景観形成補助金交付要領」（補助率2/3、限度額300万円）や「栃木市歴史的町並み景観形成資金融資要領」（限度額3,000万円、償還期間15年以内）を制定し、住民への財政的支援を行うこととした。また、蔵の修景に取り組む住民へアドバイスするために、市役所内に「まちづくり相談窓口」を開設し、修景の方法、職人の斡旋、工事中の問題処理など様々な相談を受け付けることとした。

栃木大通りを蔵の町並みにふさわしいシンボルとなる道路として整備するため、平成2年度から、歩道のグレードアップ、電線類の地中化を進めているところである。

さらに、船着場であった鯉の群遊する巴波川沿いでは、蔵の街遊歩道として、柳を植栽するなど歴史的経緯に配慮し整備を行った。

観光拠点として、蔵のまちを案内する「蔵の街広場」、百数十年の歴史のある山車を展示する「とちぎ山車会館」、憩いの場として「うずま公園」、「瀬戸河原公園」の整備を行った。

そして今も、蔵の街づくりのために、蔵の街観光館、歩く道づくりや栃木駅周辺連続立体交差事業などが着々と進行している。



4 まとめ

栃木市の街づくりは、「蔵」という個人の財産を共有の財産に押し上げることにより、魅力ある街づくりを目指し、官民一体となり進められている。整備が円滑に推進していることは、住民の理解協力が得られたことが重要なポイントと考えられる。しかし、計画当初時は、魅力ある街づくりの理念を浸透させ理解を得るために、日夜駆けずり回った多くの人達がいたことも事実である。

このような結果、蔵の町並みも徐々に甦り、観光客も増加してきた。5年に1度の山車が巡行した平成8年度の秋まつりでは、前回の平成3年度の2倍以上の約38万人の人出で賑わったのである。

参考文献

- 栃木の町並み―蔵造りに関する調査報告書（栃木市）
- 巴波川・蔵のまちルネッサンス（栃木市誇れるまちづくり委員会）
- 栃木市大通り周辺整備計画（栃木市大通り周辺整備促進協議会）